

ウェスレー研究 V.

野村 誠

ま え が き

ウェスレー研究ⅠからⅣは、主として sacrament 論を扱ってきた。そして、ウェスレー神学は、sacrament 的の神学として特色づけられることを主張してきた。そこで、次に、キリスト論は、ウェスレー神学の中でどのように位置づけられるか、またどのような役割を果たしているか考察してみたい。従来、ウェスレー神学におけるキリスト論は、聖化、完全論ほど目立たず、ウェスレー自身も、まとまった論文を発表していないため、研究の対象としてあまり取り上げられていないように思われる。それは、ウェスレーのキリスト論が、彼の説教集、日記、論文、詩、そして、『新約聖書註解』の中に散在しているので、まとめるのが多少難しいためでもある。しかし、ウェスレーのキリスト論は、sacrament 論との関連から、また、聖化、完全論との関連からも、ウェスレー神学の基として重要な役割を果たしている。

従来のウェスレーのキリスト論は、主に実存論的視点から取り扱われることが多かった。それ故、人性のキリスト、地上のイエスの視点から考察され、模範的人間としてのイエスが強調されることが多かった。また、十字架も人間イエスの視点からのみ見られていた。そして、神の子・キリストの十字架、さらに「神の痛み」は、見落されていた。この十字架上の神性キリストが、見落されると、聖化・完全論も、人間としての決断・努力の模範でしかない。しかし、ウェスレーは、十字架上のキリストに、神性を見出し、神の痛みを見出していた。そして、聖化・完全論は、この神の痛みから捉えられねばならないのではないだろうか、と筆者は考えた。そこで筆者は、ウェスレーのキリスト論を従来の研究の成果を参与にしつつ神性と人性について考察し、そして、sacrament 論、聖化・完全論との関連まで明らかにしたいと思う。

本論文は、第1章で、「25カ条」の第1条を参考に、三位一体論におけるキリストについて考察する。さらに、ロゴス・キリスト論、ケノーシス・キリスト論について、また、キリスト論における神性と人性について述べる。そして、キリストの神性と復活について考察する。また、我々人間は、キリストを通して父なる神との交わりに招かれていることを考えてみる。第2章では、キリストの地上の生涯における受難についてウェスレーの考えを見てみる。ウェスレーは、キリストの人性の受苦を通して、神性もその苦難を体験されたこと、また、このキリストの受難は、「父なる神の見えるかたち」であり、父なる神の啓示された姿、であったことを述べる。

この論文では、ウェスレーのキリスト論に、「神の痛み」があったこと、キリストの痛み、キリスト者が参与し、キリストの痛みに結びつく時、聖化・完全論が、意味を持つことを述べる。この論文のため、北森嘉蔵博士の『神の痛みの神学』、『自乗された神』を参考させていただいた。

ウェスレーのキリスト論

第 1 章 キリスト論

(1) 三位一体論からみたキリスト論

ウェスレーのキリスト論を三位一体論的視点から考察し、その後、そのキリスト論の特色を学んでいきたいと思います。1784年にウェスレーが出した「25カ条」の第1条は、三位一体論について記しているので、以下に私訳し引用した。

第1条 聖三位一体の信仰について

見えるものと見えないものの、すべての創造者にして守り主、善と知恵と無限の力の永遠者、体や部分を持たない1人の生きた真実の神がいます。そして、この神性の結合のうちに、三つの人格 (three persons)、すなわち1つの本質、力、そして永遠、——父、子、聖霊がいます。

上記のようにウェスレーは、三位一体の神、父、子・聖霊の神を信じている。ウェスレーの三位一体論は、主として、説教「三位一体論について」(On the Trinity)⁽¹⁾の中で、まとめて語られている。この説教のテキストは、Iヨハネ5:7-8である。そこで、このテキストについての『新約聖書註解』⁽²⁾におけるウェスレーの見解を調べる必要がある。『新約聖書註解』(Explanatory Notes upon the New Testament)は、1755年末に出版され、説教「三位一体論について」は、1775年5月7日に説教されているので、『新約聖書註解』から見てみる。この箇所は、本文批評において問題になっていることを、ウェスレーは認めつつ、ベンゲル (Bengelius) の『聖書理解への指針』(Gnomon Novi Testamenti, ラテン語版が1742年チュービンゲンで出版された) の解釈に従っている。⁽³⁾そして、この箇所は、『新約聖書註解下』(松本卓夫・草間信雄訳)で次のように訳されている。

地上において、あかしをするものが三つある。御霊と水と血とであり、この三つのものは、一致する。さらに、天上においてあかしするものが、三つある。すなわち、父と御言と聖霊とであり、この三つのものは、一体である。

ウェスレーは、この箇所の註解を、「(あかしをするものが三つある) 文字通りに、『あかしをしつつあるもの』となっている。すなわち、名詞のあかしの代りに分詞が用いられている。それは、あかしをしている事実と、その結果とが、今も継続していることを示すためである」(『新約聖書註解』)

と述べている。すなわち、ウェスレーは、あかしをしている事実が、現在も継続していると信じている。さらにウェスレーは、この「あかし」の主体について、「人格的存在だけがあかしできるのである」と説明し、そして、天上の三つのあかしと地上の三つのあかしが呼応すると彼は主張している。地上のバプテスマの水によって、「わたしたちは御子（と父と御霊）とに献げられる」と説明している。ウェスレーは、天上の三つ、「父と御言と聖霊」を、父は、イエスの「バプテスマと変貌とのときに、御子について明らかにあかしした」と説明し、バプテスマと変貌において、三一の神の明白な「あかし」の働きがあったと考えている。そして、「御言」について「地上にありし日にもそうだが、昇天ののちにはさらに大いなる厳粛さをもって御自身たるキリストについてあかしした」と注解している。また、「聖霊」について、「聖霊に関するあかしは主として、キリストの栄化ののちにつけ加えられた」と説明している。そしてこの三つが、「あかしにおいて一致する」と主張し、このことを彼は、次のように記述している。

何ものも御霊を、父と子とから離すことは出来ない。……。これらの三つは、その本質、知識、意志、あかしにおいて一致するのである。

ウェスレーは、父、子、聖霊を、「その本質、知識、意志、あかしにおいて一致する」と述べている。

さて、次にウェスレーの説教「三位一体について」に目を向けてみたい。ウェスレーは、この説教の中で三位一体の神が、本質を同じくしていることを光にたとえて次のように述べる。

あなたは、光を、太陽から流れ出ようとも、あるいは他の光源体からであろうとも、信じている。しかし、あなたは、その性質について、また、それが流出してくる方法について理解することができない。……。ここに、三本のローソクがある。しかし、ただ一つの光である。このことを説明することで、三位一体の神を、私は説明するだろう。(4)

ウェスレーにとっては、野呂氏も主張するごとく、「三位一体の事実^①を信じる必要があるのもあって、^②どう^③いう^④仕方^⑤で神が三位一体なのかを理解することが重要なのではない」(5)のである。そして、C. W. ウィリアムズは、ウェスレーの三一論を、キリストの贖罪者、和解者としての働きの業のうちに、神の働きが明白化されていると主張している。(6) このことについては後で展開する。

では、次に、三一論を、神の実際の働きを通して考察してみたい。まず、マリヤへの受胎告知の箇所を、ウェスレーは『新約聖書注解』の中で次のように説明している。

ルカ 1 : 35 「聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおい包むのである」
神の力は、このわざにおける神の代行者である聖霊によって、発揮された。そこで聖霊は、いと高き者の力を自分の力として行使し、父、み子と共に、いと高き神である。〔それゆえ〕 彼が永遠から神であるからだけでなく、この理由からもまた、〔神の子となえられる〕

ここに聖霊を、「神の直接の代行者」と述べ、「神の力」は、聖霊によって行使され、父、み子、聖霊を三一の神として、ウェスレーが捉えていることが分かる。次に、ウェスレーは、父、子、聖霊の三一の神が、対話の構造にあることを、『新約聖書註解』の中で次のように記している。

マタイ 3 : 17 「突如、声があつて」 これは、常に祝福する三位一体の輝かしい顯示である。父は、天から語り、子は語りかけられ、聖霊は子にくだる。

父なる神は、「天から語り」、「子は、語りかけられ」、両者の間を、聖霊が、つなぎ、そして、「聖霊は子にくだる」と彼は述べている。また、御子イエス・キリストと共に父と御霊が、共にいまし、神が、永遠の生命の源であることを、彼は、『新約聖書註解』の中で次のように記している。即ち、「〔この〕イエスは唯一の生ける〔まことの〕神であり、父と御霊と共におり、(永遠の生命)の源泉そのものである」⁽⁷⁾とウェスレーは、考えている。そして、この三一の神を、ウェスレーは、三一の「栄光の神」として、讃えている。同じく、『新約聖書註解』からの引用である。

ローマ 2 : 8 「栄光の主」 大いなるエホバにだけ献げられるこの尊い呼び名をキリストに用いたのは、キリストがいと高き神であることを明示している。同じように、父なる神は「栄光の父」(エペソ 1 : 17)、聖霊は「栄光の霊」(I ペテ 4 : 14) と呼ばれている。この三者のすべてに栄光のという呼び名が適用されていることは、父と子と聖霊とが「栄光の神」であることを示す。唯一のまことの神にのみ用いられる呼び名である。(詩 29 : 3、使 7 : 2)。

以上のように、ウェスレーは、三位一体の神を、信じ、「永遠にはむべき三位一体の神」(エペソ 4 : 3 の註解) と讃美している。

ウェスレーは、フィリオクエ (Filioque) を信じ、次のように『新約聖書註解』の中で、主張している。

ヨハネ 15 : 26 みたまが、主の証しをするために、父のみもとから来るということ、また、

このみたまが主によって父からつかわされるということは、人格的な表現であって、明らかにみたまを父、および子から区別するものである。また、その「真理の霊」なる称号は、それが父から出て来ることとともに、神的人格以外のものには適合しない。また、みたまが父から出ると同様に、み子から出るものであることは、「キリストの霊」とよばれることから（Ⅰペテ1：11）、また、ここで、キリストの名において父によってつかわされると同じく、キリストによって父からつかわされると語られていることから、十分に推論できよう。

以上のように、聖霊は、父なる神と子なるキリストから出るとウェスレーは信じている。ウェスレーの説教の中にも三一論を歌った詩が入っている。「われらの主の山上の説教について（6）」の中に「主の祈りによる讃歌」の一節である。

共に本質の同じな、共に永遠の三位なる神よ、
下なる地にても、上なる天にても、
祝福とほまれ、讃美と愛とが、
つくられたもの皆によって、
あなたに捧げられなければならない。
三重に聖なる神よ、国はあなたのもの、
全能の力はあなたのものです。
つくられた自然のほろび去る時、
終ることのないあなたの栄光が輝きます。⁽⁸⁾

この詩は、野呂氏の説明によると、*Hymns and Sacred Poems* (1742) に表われたもので、一般にジョン・ウェスレーの作と考えられている。⁽⁹⁾ また、『主の晩餐の讃美歌』の中にも、三位一体の神を歌った詩があるので、1つ紹介したい。

父、子、そして聖霊
一つにして三、三にして一、
天の軍勢により、
汝の御旨を地になしたまえ、
すべてのものにより汝に
天と地の栄光の主、讃美が与えられるべし!! (155番の1)

ウェスレーは、三位一体の神について、光のたとえを用いて、1つの同じ本質である三つの人格として捉えている。そして、この三一の神は、交わりの神であり、父は天から語り、子は語りかけられ、両者を聖霊がつなぐ語り合いの神である。この三一の神の交わりに人は聖霊によって、贖われ、招かれている。この聖霊は、父と子から出て、この世における神の直接の代行者である。

またウェスレーにとって、三位一体の神は、キリストの地上におけるその働きで表わされ、天上と地上において呼応しながら、今もなお働きたもう神の業であり、被造物によって讃えられるべきものである。そして、この三一の神の働きは、詩にも表われているように、「つくられた自然のほろび去る時」、神の栄光が輝き出るものとして、この造られた世界から隠されているものとして三一の神の栄光を、ウェスレーは讃美している。この三一論の中で、ウェスレーのキリスト論を考察していきたいと思う。

(2) ログス・キリスト論

ウェスレーのキリスト論は、説教、『新約聖書註解』、詩の中に記述されているのでまとめにくい面はある。しかし、ウェスレーは、キリストを受肉した神と信じている。この点から、ウェスレーのキリスト論は、理解されるのではないかと考えられる。ウェスレーは、『新約聖書註解』の中で次のように述べている。

マタイ 1 : 23 彼はインマヌエルと呼ばれた。これは、キリストの普通呼ばれた名ではなかった。が彼の本質と職分とを示す。彼は受肉した神であり、みたまによってその民の心の中に住む。……。彼がインマヌエル、わたしたちとともに神であると認めるであろう。

ヘブル 1 : 5 「あなたこそ、わたしの子である」 神の神、光の光。〔今日、あなたを生んだ〕永遠の昔からあなたを生んだ。……。〔わたしは、彼にとって父となり、彼はわたしにとって子となろう〕わたし自身を彼の父として認め、わたしの特別な愛のしるしとして彼を、わたしの子と認めるであろう。前の条項は、永遠の信じ難い出生による、キリストが子たることに関係している。後の条項は、キリストを神の受肉の子として神が認証し取り扱っていることに関係づけられている。

上記二つの引用において、「神の神」である「キリストを神の受肉の子」として捉え、キリストを、「受肉した神」とウェスレーが把握していることが分かる。また受肉した神は「みたまによってその民の中に住む」と彼は述べている。

ところが、野呂氏は、ウェスレーにおけるログス・キリスト論を否定している。彼は、「ウェス

レーにはロゴスが受肉の間も遍在していたという思想があったこと——遍在していたならば、ロゴスは人間になったのではない」⁽¹⁰⁾と主張している。しかし、ウェスレーは、キリストにロゴスが受肉したことを救済と結びつけ、説教「聖霊について」の中で次のように主張している。

はじめに、天的ことば——父なる神から出た聖霊と彼の力であることば——は、父なる神に似せて不死の像として人間となった。しかし、神の似像として造られた人間は、その後、力づよい聖霊が人から去った時、死ぬべきものとなった。このことを回復するために、言葉は人間となった、このことを受け入れることによって再び神の子となることができる。我らの主の肉体の上に神の光はとどまることができた。そして、そこから我々のところへ光を運んで来た、そして神性の光に囲まれた人は、不死に導かれるようになった。彼が受肉して人となった時、すべての人類を、彼においてとらえた。そして、彼が救いの中心となり、アダムにおいて我々が失ったもの、神の似像ですらも、我々は、イエス・キリストにおいて回復するのである。聖霊がマリヤの上に来て、至高の力が彼女を覆うことで、キリストの受肉が行なわれた。それ故、人が神から生まれる新しい誕生が示された。我々の最初の誕生により、我々は死を受け継いだ。ところがキリストの誕生により、我々は生命を受け継ぐのである。⁽¹¹⁾

以上のように、ロゴス（神の言）を中心にキリスト論を把握し、救済にまで結びつけている。ウェスレーは、野呂氏の主張するように、ロゴスが全部キリストに受肉した訳ではなく（ヨハネ3：13 註解）、キリストの外でもロゴスが働いていたという考え方を、持っていたにしても、ロゴスがキリストに受肉したことを信じている。このキリストを受入れることで、我々は、死すべきものが、神の子としての救いへと、生命を受け継ぐべきものへと招かれていること。そして、我々人類の救いの中心は、キリストであることをウェスレーは主張している。

（3）ケノーシス・キリスト論

さて、次に、この受肉した神は、ケノーシス（謙虚）・キリスト論につづいていることを述べたい。ウェスレーはキリストが、自らを低く下し、我々人間に救いと祝福を与えるために来られたことを、強調している。『新約聖書註解』で彼は次のように述べる。

ヨハネ1：14 全節は次のように意識できよう。[そして]、わたしたちをこの威厳と幸福とに高めるために、永遠の「ことば」が、きわめて驚嘆すべき卑下により「肉体となって」、わたしたちの憐れむべき性質と一体になり、罪を知らぬままの人間的な弱さをことごとく具えられた。また、ちょっとだけ訪れたのではなく、地上で、わたしたちの間に幕屋をは

り、昔、モーセの幕屋で示したよりも一そう著しい形で栄光を示した。

上記引用のように、ロゴス・キリスト論が、ケノーシス・キリスト論として、天からこの世に、人間を威厳と幸福へ高めるためにキリストは来られたとウェスレーは信じている。また、ケノーシス（κενωσις）・キリスト論として有名なピリピ書 2：6－7 を、ウェスレーは次のように註解している。

彼が神であるということは他人の権利侵害ではなく、彼自身の疑いもなく確かな権利である。……。神性のもつ上なき豊かさと高さを言おうとしている。これに対照的にキリストは、〔ご自身を低く〕されたのである。〔かえって〕彼には少しも固執しようとの心がなかったのだ、喜んでその特権を放棄してしまった。何の不満もなく創造者の栄光を捨てて被造物のかたちで現われた、墮落した被造物に似たものとなり、その恥を分か合ったのみか、すべての者のうち最も低く賤しい者にふさわしい刑罰をうけた。

上記引用のように、キリストは、「創造者の栄光を捨てて被造物のかたちで現れた」、そして、「その恥を分かち合った」、さらに、「すべての者のうち最も低く賤しい者にふさわしい刑罰をうけた」とウェスレーは主張している。レールヒ（Lerch）も、ウェスレーのキリスト論において、謙虚キリスト論を指摘している。⁽¹²⁾ すなわちキリストは、天上の栄光から地上へと、「墮落した被造物に似たもの」のかたちで現われ、その恥を味わわれ、最も賤しい刑罰を体験された。

さらに、ウェスレーは、「自分の救いのため努めなさい」（On Working out own Salvation）という説教の中でも、ピリピ 2：6－7 をテキストにして、キリストの謙虚について次のように主張している。

「神の形相のうちにあるキリストの心をも、あなたのものとしなさい」——神の永遠からの伝達しえない性質——「それを奪うことではなく」——（それが確かなその言葉の意味である）、他者の権利侵害でもなく、ただ彼自身の疑いない権利として、「神と等しく」ある。この言葉は、神性の充満と至高の高さを意味している。このことに二つの言葉が対立している。即ち、彼は、御自身を空しくし、卑しくされた、である。彼は、神性に満ちた御自身を「空しく」し、他の人々と同じ真の人として「僕のかたちを取り、人間のすがたになられた」、御自身を真に空しくされたことで、天使と人間の目から、彼の充満をおおわれた。「そして、人間の姿をとること」で——なんら特別の美しさも、優れたところもない、普通の人となり——いちばん低い程度まで、神と等しいにもかかわらず、「おのれをむなしうし」、「死にいたるまで、いや、十字架の死にいたるまで」「神に従順となられた」、その最大の姿は、謙虚と従順である。⁽¹³⁾

上記のように、ウェスレーは、地上に下りたもうたイエス・キリストのうちに、神性も認めている。その神性の充満は、「天使と人間の目から」おおわれて、「普通の人」となられた。そして、そのキリストの地上での「最大の姿は、謙虚と従順である」と、十字架上のキリストを要約している。そのように、地上のイエス・キリストは、人間の姿を通して父なる神に、「十字架の死にいたるまで」謙虚と従順を示された。

以上のように、ウェスレーは、ロゴスが、キリストに受肉したこと、このキリストは、死に至るまで自らを空しくし、父なる神に従順であったこと、その謙虚な姿において、「父なる神の見えるかたち」（『新約聖書註解』コロサイ 1：15）となり、人間を救いに招くためこの世に下りたもうた神の姿を示している。

（４）神性と人性

ウェスレーのキリスト論に、人性と神性の二つの性質が、明示されていることは、ディビッド・レールヒ（David Lerch）の Heil und Heiligung bei John Wesley（1941）の中で、また、C. W. ウィリアムズ（Williams）も John Wesley's Theology Today（1960）の中で主張しているとおりである。さらに、ジョン・デシュナー（John Deschner）も、Wesley's Christology（1960）^{（14）}の中で、この人性と神性のテーマを展開させている。野呂芳男氏も、『ウェスレーの生涯と神学』（1975）の中で、このテーマを扱っている。ここでは、今までの研究の成果を踏まえながら、ウェスレーのキリスト論の人性と神性のテーマを学んでみたい。特に従来の傾向は、実存主義的視点（人間イエス）からのみ考察される傾向があったが、そのことも検討してみたいと願う。

ウェスレーのキリスト論の神性と人性は、ウェスレーが、アメリカのメソジスト教会のための信仰箇条として作った25カ条の第2条に出ている。これは、英国国教会の39カ条の第2条と同じものであり、カルケドン会議のキリスト論と同じものであると言われている。^{（15）} 私訳し、以下に引用した。

御子、すなわち父なる神の言は、真に永遠の神であり、父と本質を一つにし、恵まれた処女の胎より人の本性をとられた。そして2つの全き完全な本性、すなわち、神性と人性は、一人の人格のうちに構成され、けっして分離されない。それ故、一人のキリストが、真の神であり、真の人間である。そして、彼は真に苦しみ、十字架につけられ、死んで葬られ、我々のため父なる神にとりなしをし、原罪のためばかりでなく、現在の罪のための犠牲となられた。

上記引用にあるように、キリストのうちにある神性と人性、キリストの受難、贖罪の業が示されている。また、ウェスレーは、説教の中で、父と子が1つであり、神性と人性が共有されていること

を、次のように述べている。

キリストの神的な義は、キリストの $\text{ó} \text{w} \text{v}$ であるものとしての神の本性に属する。キリストは「万物の上に」います「神であり、永遠にはむべきかな」(ローマ人への手紙 9 の 5)。キリストは至高の・永遠なる存在であり、「その人性に関しては父なる神から劣っているが、その神性に関しては父なる神と等しい」のである。さて、これがキリストの永遠の・本質的な・不変の清さであり、キリストの無限の正義・憐れみ・真実であり、これらすべてにおいてキリストは父なる神と一つである。⁽¹⁶⁾

ウェスレーは説教の中でキリストは「『その神性に関しては父なる神と等しい』」とアタナシウス信条に従っている。そして、「キリストの神的な義は、キリストの $\text{ó} \text{w} \text{v}$ である者としての神の本性に属する」とウェスレーは信じている。神の本性にキリストは属し、「父なる神と1つ」である。

さらに、地上のキリストの人性を、ウェスレーは、どう考えているのか見てみたい。まず、ウェスレーは、キリストが、律法を成就するために来たと述べている。

マタイ 5 : 17 「わたしがきたのは、廃棄するためでなく」 道德律を、〔成就するためなのである〕わたしの生活と説教とで、その最高の意味を確立し、例証し、説明するために。
(『新約聖書註解』)

すなわち、ウェスレーによれば、キリストは人間として、父なる神の人間に与えた道德律(律法)を、確立し、例証し、説明し、律法を成就したのである。そして、キリストのことは、わざを知ることによって父なる神を知るのである(ヨハネ 8 : 19、14 : 11、他)。さらに、地上におけるキリストのことは、行動も、父と一つであることを、『新約聖書註解』で、次のように述べる。

ヨハネ 5 : 19 「子は・・・自分では何一つできない」 これは、彼の欠陥ではなく、むしろ、栄光であって、父と永遠の、緊密な、分離できない合一から結果する。従って、子は父なしでは何事もさばき、意志し、証し、教えることもできず、また、父と別個に知られたり、信じられたりすることも、絶対に不可能である。

以上のように、地上のイエスの言葉、行為は、父なる神と「本質、ことば、行動において」一致している。父と子が1つであることは、ヨハネ 5 : 23、30、8 : 28、10 : 30にも示されている。したがって、地上のキリストの業、倫理性は、父なる神との「分離できない合一」にもとづいているとウェスレーは考えている。さらに、ウェスレーは、地上のイエス・キリストをして、「わたしは神

である」(ヨハネ14：11の註解)と語らしめている。

次に、イエスの神性が、明白に表われた山上の変貌について、ウェスレーの説明を見てみたい。ウェスレーは、『新約聖書註解』の中で、地上のイエスの神性と人性について次のように述べている。

マタイ17：2 「姿が変わり」 形が変わった。内に宿った神性が彼の肉の覆いを貫いて、その光線を放ち出した。しかもきわめて超越的な輝きをおびていたので、彼はもはや僕の形をとらなかった。彼の顔は、日盛りの太陽のように、神にふさわしい威光が輝いた。また彼の肉体はそれに照らされて、衣服はその栄光を隠し得ず、衣服のように身を包んでいた光そのままに、白く、まばゆくなった。

つまり、「神性が彼の肉の覆いを貫いて」輝き表われ、イエスは、「もはや僕の形をとらなかった」とウェスレーは、述べている。この山上の変貌を、イエスのバプテスマと並んで、ウェスレーは、イエスの神性の証として理解している(Ⅰヨハネ5：8註解参照)。また、マルコ福音書では、山上の変貌の記事の註解を、ウェスレーは、次のように記している。

9：2 「姿が変わり」 ギリシャ語は、パウロが述べている「神のかたち」、「僕のかたち」(ピリ2：6、7)に関係すると思われる。内在する神がこの折に射出した神的光線が、これらの形の一つからほかの形と輝かしい変化を行なったことを暗示するかもしれない。

ここでは、山上の変貌で、イエスの姿が、「これらの形の一つからほかの形」へと変わった。すなわち、「僕のかたち」から「神の形」へと、「内在する神」が顕示された。この二つの変貌の記事の註解から(ルカの変貌の記事を、ウェスレーは註解していない)、ウェスレーは、地上を歩まれたイエス・キリストに、神性と人性があったことを主張している。

更に、ウェスレーは、山上の変貌以外のイエスの地上の歩みも、「父のひとり子の栄光」の現われと表現し、神性が示されたことを、ヨハネ1：14の註解から次のように述べている。

あらゆる点で、〔それはまさしく父のひとり子の栄光〕であったと、証言できる。なぜなら、それは、彼の変貌の時、また絶えず行なわれた奇跡の中ばかりでなく、彼の生涯の全段階を通じて、すべての心構え、奉仕、行動の中に照り出たいっさいのうちに、彼は〔めぐみとまことに満ちて〕見えた。彼自身、きわめて慈悲深く、廉直であった。モーセの律法ではできなかった数多くのゆるしを、罪人たちに対して与えられた。また現に、最も実

質的な祝福を示した。これに反して、モーセの律法は、「来るべき良いことの影」(ヘブ10：

1) にすぎなかった。

上記の引用では、変貌ばかりでなく、奇跡、心構え、奉仕、行動、慈悲深さ、モーセの律法を超越した赦しを罪人に与えたこと、また、祝福の業、これらに、キリストのうちにある神性を見ている。以上のように、ウェスレーは、人間として地上を歩まれたイエス・キリストのうちに神性を認めている。ところが、野呂氏は、地上のイエス・キリストの人間性のうちに神性を認めていない。野呂氏は、「ウェスレーによると、イエスは徹底的に人間であった」、そして「キリストの人間の中に、実体的に神性が少しも混入していない」と主張している。⁽¹⁷⁾ところがウェスレーは、前述のように、人間としての生涯においても、「父のひとり子の栄光」が、現わされ、神性が示されたことを記している。また、エペソ1：3の註解でもイエスを神性においてばかりでなく、人間性の人格においても神にもっとも近いつながりをもつものとして、ウェスレーは捉えている。

第一にイエスを神のひとり子として、神の本質につながる者として見ているのであり、第二に、神に人格的に最も近いつながりをもつものとしてイエスが、彼の人間性において見られるのである。

つまり、ウェスレーは、イエス・キリストの神性だけでなく、人性においても、神性を見ている。すなわち、地上のイエス・キリストの神性と人性の両方が、父なる神を啓示しているとウェスレーは、主張している。以下の引用は、コロサイ1：15「御子は、見えない神のかたち」のウェスレーの註解である。

神のひとり子以外には、誰も表わすことの出来ない神。キリストの神性の内に父なる神の
見えないかたちを、キリストの人間性の内に父なる神の見えるかたちを。

上記のように、キリストの神性、人性ともに「父なる神」を表わしているとウェスレーは考えている。即ち、キリストの神性は、「父なる神の見えないかたち」であり、キリストの人間性は、「父なる神の見えるかたち」である。すると、地上のイエスの生涯、受難、十字架、復活、そのすべてが、「父なる神の見えるかたち」であった。この地上のイエスが、「父なる神の見えるかたち」であることは、ヨハネ17：1「子に栄光をお与え下さい」の受難の前の言葉を、ウェスレーは、「子は、自分が栄光を受ける前にも後にも、父の栄光をあらわした」と記して、地上のイエスの生涯が、「父の栄光」であったと註解していることから、納得されうる。

さらに、ウェスレーは、「属性の交流」又は「属性の共有」をキリストの人性と神性において主

張している。次の引用は、ヨハネ 3 : 13 の註解である。

〔天から下ってきた人の子〕、すなわち、天にいる者〔のほかには・・・天に上った者はいない〕だから、彼は遍在である。さもないと、同時に天と地にいるはずがない。これは、神性と人性との間の属性の交流と、一般に名づけるものの明白な例である。この交流によって、神性に固有のものが、人性について語られ、人性に固有のものが、本節のように神性について語られる。(下線筆者)

ウェスレーは、ここで明白に、神の遍在と、「属性の交流」について語っている。ウェスレーは、「属性の交流」(*Communicatio Idiomatum*)を「神性に固有のものが、人性について語られ、人性に固有のものが、・・・神性について語られる」と述べている。

また、ウェスレーは、ヨハネ 8 : 16 の註解で、次のように、キリストにおける神性と人性の問題を述べている。

〔わたしをおつかわしになった父とが〕父は彼の中に、彼は神の中にいる(ヨハネ 14 : 10、11)。だから、父は子と共にあって、ひとりではなく、同様に子は父と共にいる(箴 8 : 22、23、30)。父と彼とは別々の神ではなく、ひとりの神であり(ただし、別個の位格)、従って互いに分けられない。また子は父から出て来て、人性を取り、地上のメシヤとしての職分を果たしたが、これは、神が自己を特別に顕示するために、天から来たのだと、時としては言われる場合である。しかし、キリストは父を、また父はキリストを去ったのではない。これは地に来たといわれる時にも、神が天を去らないと同じである。

レールヒ (*Lerch*)は、この箇所からウェスレーにおける「属性の交流」(*Communicatio Idiomatum*)を主張している。⁽¹⁸⁾ ウェスレーは、上記引用の箇所で、キリストと父なる神は、共にいますが、地上にキリストがいます時にも、神は天にいますと主張している。また、地上のイエスは、「父から出て来て、人性を取」った、それは、「神が自己を特別に顕示するために、天から来た」と述べ、ウェスレーは、「属性の交流」を考えていたと言えるのではないだろうか。キリストの人性において、神性の共有の思想がウェスレーの中にあることを、デッシュナー (*Deschner*)も指摘している。

ウェスレーは、属性、あるいは、特性の共有の教理 (*Communicatio Idiomatum*)を前提している。・・・イエスが、くわの木を呪った出来事を、イエスは、「すべてのものの創造者であり所有者」(マルコ 11 : 22) であるという理由で、ウェスレーは、その行為を弁

護している。ここで、「すべてのものの創造者であり所有者」という神の名称は、イエス・キリストに与えられ得た。⁽¹⁹⁾

すなわち、神の属性が、イエス・キリストの人格において、共有されている⁽²⁰⁾とデッシュナーは、主張している。さらに、デッシュナーは、ウェスレーの「属性の交流」の概念がマルコ6：6と13：32の註解にも出ていると述べている。⁽²¹⁾以下に、『新約聖書註解』から引用した。

マルコ6：6 「驚き怪しまれた」 人として。彼は神であったから、何事も意外なもの
はなかった。

マルコ13：32 「その日」 審判の日は、しばしば、聖書では強く、「その日」とよば
れる。〔子も知らない〕人としては、知らない。人としては、彼は遍在でも全知でもない。
しかし、神としては、その状況いっさいを知っている。

デッシュナーによれば、上記の個所に、人間として歩まれたイエスが同時に神であったことをウェ
スレーは考えており、「属性の共有」あるいは「属性の交流」があったとデッシュナーは主張して
いる。ウェスレーにおいて、地上を歩まれたイエスは、神性と人性の「属性の交流」を持ち、その
人格においても、神性においても、見えない父なる神を啓示していたと考えられる。

（５）キリストの神性と復活

ウェスレーは、地上のイエス・キリストに神性があったことを信じていたが、その神性は、十分
明示されてはいなかったと考えている。しかし、ウェスレーは、キリストの神性は、特に復活によ
って証されたと考えている。パネンベルクは地上のイエスと父なる神の関係を三一論的に捉え、キ
リストの神性は復活によって、明白になると主張しているが、⁽²²⁾ウェスレーも、次の引用のよう
に『新約聖書註解』の中で復活によりキリストの神性が、充分明示されたと主張する。

ローマ1：3 「血属によれば、ダビデの子孫から出」 すなわち、イエスの人間性に関
して、ここにわれらの救い主の神性とがふたつながら述べられている。ただし、救い主の
復活ののちまでは、その神性が充分明示されなかったので、ここには人間性が先に述べら
れている。

野呂氏も、「復活の出来事はイエスがキリストであったことの偉大な証拠であり、イエスの教えが
神的な教えであったことを証拠だてている。」⁽²³⁾と主張している。ルールヒも、このことを、「キ

リストの本性の統一は、復活と昇天の実現によって完成される」⁽²⁴⁾と考えている。しかし、ウェスレーにおいて、キリストの神性が、復活以前になかったというのではないことは明白である。彼が「キリストが神の子であることは、何も復活ののちに発生したことではない」（ヘブル5：8の註解）と述べていることから納得されうる。

ウェスレーは、キリストの甦りを肉体の復活であると確信していたことは、野呂氏も指摘しているとおりである。⁽²⁵⁾ このことは、「25カ条」の第3条に出ている。

キリストは、真に死から復活し、人間の完全な本性に属するすべてのものと共に再び彼の肉体を取り、そして天に昇り、すべての人を最後の日に審くために再臨するまで、そこにとどまっている。

キリストは、人間の肉体を取って復活したとウェスレーは信じている。たとえば、マルコ12：27の註解で、彼は、復活とは、「靈魂と共にあずかるための肉体の復活があるはずである」と主張している。そして、ウェスレーは、キリストを、「わたしはわたしの神的性質においては生ける者であり、また人的性質においては、よみがえって、天にあって永遠に生きるであろうから」（ヨハネ14：19の註解）と記述している。

パネンベルクも、『キリスト論要綱』の中で、キリストの神性は、復活によって証されると主張していることを紹介したい。即ち、「イエスに起った死人からの復活によって、神に全面的に献身した方として復活において確証される点では、彼は神の神性の啓示者であることが明らかとなる。彼は父に完全に服従する者として、神の神性の啓示者であり、かくして彼自身は神の本質にわが難く属している。そのゆえに彼は御子なのである。」⁽²⁶⁾とパネンベルクは述べる。ウェスレーにおいても、パネンベルクが主張するように、キリストの神性は、復活後十分に明白化されたと考えられている。

（6）キリストを通して父なる神との交わりへ

ウェスレーは、キリストを通して、父なる神とキリストが共有している恵の交わりに、我々人間が招かれていることを次のように『新約聖書註解』の中で述べる。

ヨハネ20：17 「わたしの父であって、あなたがたの父、また、わたしの神であって、あなたがたの神であられるかたのみもとに」 この尋常でない表現は、独り子が神とあらゆる種類の交わりをもっていることを示す。またある点では自分自身のもつ交わりにも似た神との交わりを、兄弟たちにも与える。しかし「わたしたちの神」とは言わない。なぜならおよそ被造物は神と同等位には高められ得ないのだから。ただ、「わたしの神」また「あ

なたがたの神」というが、父は、特異な、独自の意味で、彼の神であること、そしてただ彼によって、被造物に可能な限りにおいて、わたしたちの神であることを示す。

「被造物」は、ただキリストによってのみ「可能な限りにおいて」、神との交わりを持つことが許されるとウェスレーは信じている。キリストを通して、父なる神とキリストが共有している恵みの交わりに、我々人間も招かれていることを教えている。また、ウェスレーの説教の中にも、キリストを通して、我々人間が、父なる神との交わりを与えられることを次のように述べている。

キリストは、「神が聖霊を、はかりではかつて与えた方ではなく、神性全体が、彼のうちに充滿している。そして彼の充滿を、我々は、すべて受け、恵みに恵みを増し加える」。実際、神性のすべての交流は、すべての被造物が、それを受くことができるが、それはつねに神の言葉であるイエス・キリストから出ている。しかし、今、地上の状態にある人間はすべて、その身体によって彼から受けねばならない。はじめに、死ぬべき、そして、“神に似たものの内にある” 栄光を受けねばならない。イエス・キリストは、彼らのために御自身を捧げられた。(27)

「神の言葉であるイエス・キリスト」を通して、神性の交流を我々人間は受けるとウェスレーは述べる。同じく、ウェスレーは、見神（Visio Dei）も、キリストを通して、父なる神を見ることがと主張している。この見神を通しての神との交わりについては、すでに言及したが、ここでは、キリスト論として、新しい資料で紹介する。

Ⅱコリント 4：4 「神のみ姿であるキリスト」 この故にわたしたちは、キリストの栄光がどんなに大いなるものであるかを理解できよう。御子を見る者はキリストの顔の内に、父を見る。御子はわたしたちに対して正確に、父を示すのである。（『新約聖書註解』）

上記のように「キリストの顔の内に、父を見る」と述べ、キリストは、「わたしたちに対して正確に、父を示す」とウェスレーは考えている。このことについて、以前引用した箇所であるが、重要な詩であるので引用する。

汝の受苦、いとし子、
彼において、神のほほえみを
私は、見る。
彼において神は、

私に満足される。

(H. L. S. 125 : 1)

上記のようにウェスレーは、神の御子、キリストの受苦を通して、我々は「神のほほえみ」を見、逆にキリストの受苦において、「神は、私に満足される」とウェスレーは述べる。キリストの受苦を通して、我々は父なる神との交わりに参与を許される。ウェスレーの「属性の交流」(Communicatio Idiomatum)はキリストを通して、父なる神との交わりに人間が、参与することを許されることである。野呂氏も、このことを、「ウェスレーの属性の交通は、神性と人性の属性とが実体的に浸透することを主張したところのルター主義のそれとは異なっている。ウェスレーの場合には、属性を交通して語ることができる」⁽²⁸⁾と述べている。この主張に我々は賛成である。「この属性を通して語ること」については、前出のマタイ 3 : 17の註解、「父は、天から語り、子は語りかけられ、聖霊は子にくだる」ということについて〔第1章 (1)〕、説明した。また、神の三一の交わりにキリスト者が、招かれることについては「ウェスレー研究Ⅳ」のCで説明したとおりである。

第 2 章 キリストの受苦

(1) キリストの受苦

ウェスレーのキリスト論は、キリストの受苦、十字架、特に贖罪の業に、三一論的、ダイナミックな、神の働きが明示されている。それは、ヘブル 9 : 14 の註解を、「あがないのわざは、全き三位一体の神のわざである。このあがないの完成に必要な驚くべき謙讓を示したからといって第二の位格〔キリスト〕だけがこのわざに関係していたのではない」と述べ、キリストの贖罪の業における三一の神の働きをウェスレーは示している。そういう訳で、キリストの受苦、十字架の業について考えてみたい。また、キリストを「驚くべき謙讓を示した」と表現している。そこでキリストの受苦という点からケノーシス・キリスト論についても、さらに考察したいと願う。

ここで、従来どのように、このキリストの受苦が、理解されていたか見てみる。野呂氏は、神の受苦を否定して、次のように述べている。

ウェスレーが伝統的な神の不受苦性の教理を保持していたことは、体験的に言って理由のあることである。・・・現在信者が所有しうる永遠の生命であるところの、あの新生と聖化とを強調したウェスレーが、神の受苦を許容できなかったのは当然である。⁽²⁹⁾

野呂氏は、「新生と聖化とを強調したウェスレーは、神の受苦を認めなかった」と主張し聖化論と神の受苦は、一致しないと考えている。そして、野呂氏は、「ウェスレーは、神の不受苦性 (*impassibilitas Dei*) というイギリス国教会の伝統に忠実であった」⁽²⁹⁾ と主張し、聖化、完全論との関点からも次のように述べる。

ウェスレーにとって、神は、すべてのものを完全に導くところの創造者 (*der alles zur Vollendung führende Schöpfer*) である。ここで、完全または完成は、聖潔と幸福との結合物である。ゆえに、ウェスレーによれば、神ご自身が所有されている完全は不受苦の祝福であり、全くどのような苦しみをも排除するものである。⁽³⁰⁾

野呂氏は、ウェスレーの完全論を、「聖潔と幸福との結合物である」ので、「神ご自身が所有されている完全は不受苦の祝福であり、全くどのような苦しみをも排除するものである」と主張している。野呂氏が主張するように、聖化論と幸福論はウェスレーの中で結びついている。しかし、十字架の意味は、キリストの受苦ではないのだろうか。聖化され、完全となっていくことは、苦難のないことだろうかという疑問は残る。

野呂氏は、神の不受苦性の根拠として、ウェスレーの説教「聖霊を悲しませることについて」の

中の、エペソ書4章30節を「神の中での苦悩を少しも意味しないように解釈している」と野呂氏は理解している。たしかに、野呂氏の理解が、あてはまりそうな一面はある。しかし、この説教を読めると、明白にウェスレーは人間が罪を犯すことで聖霊（即ち、神）を悲しませると主張している。

我々の罪によって、我々は聖霊を悲しませると言われる、聖霊の臨在にもかかわらず、罪は、聖霊の目前で、直接おかされる、それ故、聖霊へのより高い攻撃である。⁽³¹⁾

我々は、我々の罪によって聖霊を悲しませる。なぜなら、我々の罪は、神の愛のもっとも高い表現への大きな侮辱であり、彼の最後の救いによって、そのことで我々の回復のため喜んで忍耐している彼を失望させる。そして、そういう訳で聖霊の助けにもかかわらず、我々の犯すおのおのの罪は、神の非難に対する挑戦となされ、神の無限の慈愛に対して忘恩を返すのである。⁽³²⁾

以上のように、ウェスレーは、我々の犯す罪は、聖霊（神）を悲しませ、神を「失望させる」と信じている。もちろん、神のうちにある感情を、我々人間の感情で、同じ程度のものと考えすることはできないだろう。しかし、神は、人間の罪に対して無限の嫌悪の感情を持つとウェスレーは述べている。⁽³²⁾ 以上のように、ウェスレーは、我々の罪は、神を悲しませると見なしている。

では次に、キリストの生涯を通して、ウェスレーは、受苦、受難をどのように考えているか、順次、考察していきたい。まず「25カ条」の第2条の後半の部分を考えてみたい。この箇所は、ウェスレーのキリスト論の総まとめであるとも言える。即ち、「それ故、1人のキリストが、真の神であり、真の人間である。そして彼は真に苦しみ、十字架につけられ、死んで葬られ、我々のため父なる神にとりなしをし、原罪のためばかりでなく、現在の罪のための犠牲となられた」とある。つまり、「真の神であり、真の人間である」キリストが、「真に苦しみ、十字架につけられ、死んで葬られ」たのである。即ち、神が、人間イエスの体験を通して、苦しめられたとウェスレーは考えている。

ここで、従来このウェスレーのキリスト論における受難の問題が、どのように理解されていたか野呂氏の研究から見てみたい。野呂氏は、「十字架の死というキリストの人性に固有である事柄を、神の死という神の子に属する事柄としても語ることができた」⁽³⁴⁾と主張している。しかし、野呂氏は、ウェスレーのキリスト論における神の受苦については次のように述べる。

ある意味で神ご自身が死を経験され、また、苦悩を負われたという思想が、ウェスレーの

贖罪論の中に存在すると我々が言う時、我々は決して、彼が神の本質にかかわる死や苦悩を主張したと言っているのではない。⁽³⁵⁾

そして、野呂氏は、「ウェスレーにとって、神の死とか苦悩とかは、関係概念であって本質概念ではない」⁽³⁶⁾と考えている。それ故、「ウェスレーにとっては、神の悲しみは、ご自身の永遠の本質の中に苦痛や苦悩を体験することのない神の同情を意味する」⁽³⁷⁾と彼は述べる。つまり、野呂氏の理解では、神は、人間の痛みをイエスを通して体験されるのではなく、イエスを通して「苦痛や苦悩を体験することのない同情」を持つことになる。このことが、野呂氏の言う関係概念の内容だとすれば、彼にとってキリストの受難も、「人間に向かっての神の愛ある関心」⁽³⁸⁾になる。すなわち、神と人間は、本質的に関わりを持たないのだ。

しかし、ウェスレーは、キリストの受難は、「真の神であり、真の人間である」(*Verus Deus, verus Homo*)キリストが、受難を受けたのであり、神が、人間イエスの受難を通して、人間の苦難を体験されたと主張している。このことを、次に、イエスの生涯を通して考えてみたい。

(A) イエスの地上の生涯における受苦

地上のイエスの生涯を通して、『新約聖書註解』に表われた苦難の問題を、ウェスレーが、どのように理解しているか見てみたい。

マタイ26:37 「悲しみに満たされて深い苦悩を感じはじめられた」 恐らくは全能者の矢が彼の魂に強くつきささるのを感じたために、神の直接のみ手によって、この時彼につきつけられた苦しい (*painful*)、恐ろしい (*dreadful*) 感情がどんなものであったか、誰が告げられようか。

この箇所には父なる神の人間の罪に対する怒りと、人間となって罪を負う子なるキリスト、この深い対立を自己のものとされるキリストの姿が示されている。この箇所を、レールヒ (*Lerch*) は、創造者と被造物の対立は深められ、その対立をイエスが、自己のものとして受けとったと説明している。⁽³⁹⁾ この箇所には三位一体の神の構造が、明白に表わされている。父なる神の怒りと、罪を負う子なるキリスト、その間に、聖霊が、「全能者の矢」となり、「神の直接のみ手」となって、子なるキリストに働きかけている構造である。

ヨハネ12:27 「いま、わたしのたましいが悩みもだえている」 彼には、受難のさまざまな予想があった。……。次の、「この時からお救いください」、「わたしは、このために、この(苦難の)時のためにこそ、(この世に)きたのだ」の二つの句は、彼の心を、

一瞬、のぞき見させたものだと思われる。

ウェスレーは、この二つの句から、キリストの苦悩を説明している。すなわち、受難を避けたいという誘惑と、「この（苦難の）時のために」来たという、言わば、我々人間が、試練に会う時、遭遇する内心の葛藤、分裂の苦しみを示している。

ヨハネ12：33 「人の子が栄光を受ける時が、ついにきた」 父とともに、あらゆる被造物の見ているところで。しかし、まず苦難を受けねばならない。

ルカ22：44 「苦しみもだえつつ」 暗黒の力と格闘し、神の怒りの重圧を感じ、同時に、悪霊の大軍に包囲されて、悪霊どもはイエスの傷ついた魂を圧迫し、迷わせんと、あらゆる限りの力をふりしぼり、悪意の限りをつくした。

マルコ14：33 「ひどく心騒ぎ」 原語は、悲しみの混ったきわめて心をゆすぶる驚きを意味する。次節に「悲しみ」と訳す語は、イエスが四方八方を悲しみで囲まれ、この悲しみが彼の靈魂を肉体から引き離さんばかりに烈しく、彼におそいかかっていることを暗示する。

以上の引用は、十字架につく前の地上のイエスの苦難を、ウェスレーが註解しているものである。イエスは、栄光を受ける前に、「まず苦難を受けねばならなかった」、そして、ゲッセマネの園で、悪霊によって、「イエスの傷ついた魂」は、攻撃され、イエスは、「四方八方を悲しみで囲まれ」た。また、このゲッセマネの園で、イエスは、「神の怒りの重圧を感じ」、人間としての苦難と孤独を体験された。

（B）十字架上のキリスト

次に、ウェスレーは、十字架上のイエスの苦難を、『新約聖書註解』の中で、次のように説明している。

マルコ15：34 「わが神、わが神、なぜ、わたしをお見捨てになったのですか」 これによって、神を自分の神と主張した、それと同時に、自分がわたしたちの罪を負っているのに、天父がその愛の表示をなさらず、かえって、自分を敵のごとくに取扱われるのを悲しんだ。

マタイ27：46 「そして第九時ごろに、イエスは大声で・・・呼ばれた」 主の偉大な苦闘は、多分、三時間にもわたって続いた。その終りに、ことばに表わされないほどのものを、神自身から受けて苦しみながら、イエスは次のことばを叫んだ。「わが神、わが神、なぜ、わたしをお見捨てになったのですか」これによって、主は同時に神への信頼を表現する。また、烈しい苦悩の意識を表現する。すなわち、神はイエスの上に暗黒の力を解き放ち、神の臨在を見出すなぐさめを取り去り、そしてイエスの魂は、自分がいま負っている罪のために、神が怒っておられるという恐ろしい意識でいっぱいであった。

マタイ27：50 「ついに息を引きとられた」 イエスは、自分の自発的な行為によって、彼にのみ特異な仕方で死んだ。かつて存在したすべての人間の中で、ただ彼だけが最大の苦しみを受けながらも、好むまま長らえて生き続けることもできたし、あるいは、適当だと考えた時はいつでも、肉体から退去もできたのであろう。また死にあたって彼が示した愛を、このことはいかにもよく説明してくれるのではないか。イエスは、肉体が十字架につけられるとすぐに、力をふるって、肉体を捨てて、感覚のない屍体だけを殺人者の残忍な仕打ちに任すことはしなかった。かえってゆるがない決意をもってただしい限りいつまでも、肉体のうちに宿りつづけた。その後、肉体から退去したが、他のどんな死においても知られなかった、また知られるはずのない威光と威厳とをもって、退去した。いわば、いのちの君 (the Prince of Life)のごとくに死んだ、と表現できよう。(下線筆者)

以上の引用に示されているように、イエスは、十字架上で苦難を体験した。そして、特に御子イエスが、父なる神に、「敵のごとくに取扱われ」、苦悩を「神自身から受けて苦しみ」、イエスは人間の側に立って、「罪のために、神が怒っておられる」のを体験された。そして、「かつて存在したすべての人間の中で、ただ彼だけが最大の苦しみを受け」、「威光と威厳とをもって」、「いのちの君のごとくに死んだ」とウェスレーは、教えている。「いのちの君」すなわち、神である救い主(メシヤ)⁽⁴⁰⁾として十字架上で、イエスは死んだとウェスレーは主張している。

ウェスレーは、ヘブル5：7の註解で、十字架上のイエスは、父なる神の御手によって、人間性が支えられ、苦痛の中で耐え、神の御旨を全うされたと述べている。

彼が最も強く恐れたことは、永遠の正義の重さであった。神自身の手によって、「傷つけられ」、「悩まされる」ことであった。これとくらべれば他のことは、無に等しかった。それでもなお、父なる神の正しいみ旨にどうしても従順であり、そのためには「羊のためにいのちを捨てん」ことを切に願ひ。こうして、「受けねばならないバプテスマを受ける」(ルカ12：50) ことを激しく求めたのであった。まことにキリストの人間性は、全能者の支え

を必要とした。そしてこれを求めて、「はげしい叫びと涙とを」献げたのである。しかし、彼の全生涯をとおして示したのは、彼の汚れなきたましいを悩ましたのが、自分が経なければならぬ苦難ではなくて、かくも聖なる神に対して罪が与えた冒瀆であった、ということである。これが神のみ旨なのだとの考えは、彼の恐れを押し静め、やがてこれを呑んでしまった。そして彼の祈りは聞き入れられた。ただその杯が取り去られるという形ではなく、何の恐れもなくその杯を飲みほすことが出来るという形においてであった。(下線筆者)

上記のように、「キリストの人間性は、全能者の支えを必要とし」、そして、「何の恐れもなくその杯を飲みほすことが出来るという形」で、父なる神は、御子キリストの人間性を支えられた。この個所は、キリストの十字架の苦難をウェスレーが説明した個所であるが、三一論的構造が見られる。即ち、歴史上の人間を救うため、子を犠牲として見捨てる父なる神と、人間を救うため父なる神に見捨てられる子なるキリスト、そして、キリストの人間性を支え、両者をつなぐ聖霊の三位一体論的構造が示されている。

O・E・ボーゲン (Borgen) によれば、「ウェスレーは、キリストにおける神性の存在を強調した。事実、真の三位一体は、受肉と受苦と、復活の恵みを人々に与えるために存在し、働いた」⁽⁴¹⁾と述べている。また、レールヒも、ウェスレーのキリスト論の卑下と謙虚に、三位一体論が示されていると主張している。⁽⁴²⁾ ウェスレーは、神に見捨てられ低くされたイエス・キリストに、「父なる神のみえるかたち」(『新約聖書註解』コロサイ 1:15) を認識している。すなわち、「真の神であり、真の人間」(Verus Deus, verus Homo) としてイエスは、十字架上で死んだとウェスレーは考えている。

ウェスレー兄弟の書いた『主の晩餐の讃美歌』(Hymns on the Lord's Supper) にキリストの十字架についての多くの表現がある。この『主の晩餐の讃美歌』は、ウェスレー兄弟によって1745年に出版されたものであるが、今日では、ラッテンベリーの研究の結果、ジョン・ウェスレーの思想を理解するための「権威ある基礎資料である」と言われている。⁽⁴³⁾ それで、次に、この詩を参考にしつつ考察を進めたい。次に引用する詩は、以前「ウェスレー研究Ⅳ」という拙論の「見神と聖餐式」という節の中で引用したことがあるが、神の十字架上の受苦の問題に関連しているので、引用させていただく。ウェスレーは、十字架上で苦しんでいるキリストを視覚化し(ラッテンベリー)⁽⁴⁴⁾、具体的イメージによって十字架上のキリストの詩を提示している。Hymns on the Lord's Supper を、H. L. S. と略記する。

だが、我らの信仰は、けっして動かされないだろう。

揺がず立つ、汝の愛故に、

見えない証拠を確信して、
今、間にある歳月を越え、
そして、十字架上で血を滴らせている汝を見る。
我がために、我がために死んだ、私の神！

(下線筆者)

(H. L. S. 5 : 3)

以下の詩は、このたび始めて紹介するが、いずれも、十字架上の苦難のイエスに神性を見出している。

私のイエスが示したほどの
愛と悲しみはない。
むこうの十字架上に、伸びきったイエスを見よ、
我々の重荷の下でつぶされた！
今、神性を見分ける。
今、イエスの天よりの出生が宣言される。
信仰は、叫び出す、これは神だ、これは神だ、
私の神が、そこで苦しんでいる。

(下線筆者)

(H. L. S. 21 : 3)

私は、親愛なる贖い主の恵みを求める。
私は、十字架につけられた者を捜し求める。
私のかわりに苦しんだ人、
うめき、そして、死んだ神！

(下線筆者)

(H. L. S. 74 : 1)

見よ、殺害された犠牲、
見よ、血に汚された祭壇を、
我々の目の前で受難を受けた、
信仰が、死にかけている神を見分ける。

(H. L. S. 18 : 2)

以上のように、ウェスレーは、十字架上で受難を受け、死にかけているイエスに神性を認めている。
ウェスレーは、十字架上の受難のキリストのうちに「神性を見分け」、「天よりの出生が、宣言され

る」と記述している。そして、ウェスレーは、十字架上のキリストのことを、「私の神が、そこで苦しんでいる」と表現している。ウェスレーは、イエスの十字架上の苦難のゆえに、キリストの神性を主張している。さて、この問題、神の受苦について、他の神学者は、どのように考えているか、すこし参考にしてみたい。このことについて、佐藤敏夫博士は、『救済の神学』の中で、バルト神学において、キリストの受苦が、神の苦しみであったということを語っている。即ち、「和解（贖罪）行為の主体が人間キリストでなくて、神であるとすれば、その神はバルトにとってどのような神であろうか。それはキリストにおいてこそ、またキリストにおいてのみ知られる。しかるにキリストは自己を低くし、卑しくする方であり、十字架上において苦しむ方である。そのことは神自身が自己を卑しくし、苦しむ方であることを意味する。キリストの謙卑と苦しみがとりもなおさず神自身の謙卑と苦しみにほかならないのである。」⁽⁴⁵⁾と述べている。ウェスレーも、十字架上の受難を受け、死にかけているキリストに、神性を認めている。

しかし、ウェスレーは、父と子は、あくまで別個の位格であることにより、三位一体の神の働きを、主張している。ウェスレーは、ヨハネ8：19の註解で、イエスは、「父を知りたいならば、まず子を知るべきであると教える。父がどこにいますかは、彼が示している。他方、父と彼とは、二人の証人であるから、別個の位格であることを、しかも、彼を知ることは父を知ることを含むからして、本質においては一つであることを、明白に示す」（『新約聖書註解』）と述べ、父と子を区別している。つまり、「キリストは、父なる神の一樣態（mode）として苦しんでいるのではなく、永遠の昔から父とは区別される子なる神であり、その子なる神が受肉し、十字架上において人性においてのみならず神性においても苦しんでいる。この意味において神は人間のために苦しむのである」（佐藤博士）と言える。⁽⁴⁶⁾ウェスレーにおいても、キリストの受難は、人性を通して神性も受難を体験していることが示されている。特に、「わたしと父とは、本質、ことば、行動において、一つである。」（ヨハネ14：10の註解）とウェスレーが、註解していることから、理解されうる。まさに、地上のイエスの受難は、「父なる神の見えるかたち」（コロサイ1：15の註解）として、神の本質を、我々に示されたのである。

では、キリストの受難において示された、「父なる神の見えるかたち」とは、何だったのか、このことをより深く考察してみたい。このことを、父なる神が失われた人を労苦して捜し出し、また、赦し難い罪人を受け入れる愛の姿であるとウェスレーは考えているのではないだろうか。次のウェスレーの註解にそのことが示されている。一つは、迷子の子羊を捜し出す羊飼の譬えであり、その次は、放蕩息子を迎え入れる父親の譬えである。『新約聖書註解』からの引用である。

ルカ15：4　〔捜し歩く〕　失われた魂を取りもどす時に、いわば、神は労苦（labour）される。

ルカ15：32 神の、傷つけられた愛（injured goodness）から来る恵みの歓迎を彼らが発見する様を驚異と喜びとをもって眺めるがよい。このような放蕩児が父のもとに帰る時、父は彼を遠くにあっても認める。

上記の引用のように、キリストの受難は、失われた人間を捜し出し、取りもどすため神が労苦される姿であり、罪人を受入れる「神の傷つけられた愛」の姿である。ウェスレーは説教の中でも、キリストの使命を、「彼は永遠の栄光からおのれをむなしくして、父のみもとから現われて、父なる神の意志を人の子たちに告知し、それからまた父のみもとに帰られる。あの愛の神である」⁽⁴⁷⁾と語っている。まさに、地上のキリストの苦難のうちに、父なる神の傷つけられた愛、労苦、そして謙虚が示されていることが分かる。それ故、十字架は、三位一体の神内部の行為（北森博士）である。⁽⁴⁸⁾

この「神の受苦」について、もう少し考えてみたい。この問題を、北森嘉蔵博士が「神の痛み」として捉えていることは衆知のことである。そこで、北森博士の『自乗された神』⁽⁴⁹⁾を中心に考えてみたい。この「苦しむ神」について北森博士は、「キリストの人格において神性と人性とが結合しているゆえに、人間イエスの属性が神に適用され、『神が苦しむ』と言うことができる。」⁽⁵⁰⁾と説明している。また、「若しキリストの苦難が神御自身の苦難でなかったならば、それは神の痛みではなかったであろう。然しまた若しキリストの苦難が神の外に生起せる苦難でなかったならば、それはまた神の痛みではなかったであろう。キリストの苦難が神の外に於て生起せる神御自身の苦難であるが故にのみ、それは神の痛みなのである。神の痛みは、神が自己を分裂せしめつつ而も神として留り給う所に成り立つ。キリストに於て神が御自身の外に出で給う時。神は決して神たることを止め給うのではなく、却って逆にその時こそ神は最も神らしくなり給うのである。神は自己を固執せずして自己を空しくし僕の形をとり給う時こそ、却って神たる性格を最も明瞭に示し給い、かくして一切を征服して凡てのものの主となり給うのである」⁽⁵¹⁾と述べている。ウェスレーのキリスト論の中にも、「神の痛み」があることは述べた。ウェスレーは、『主の晩餐の讚美歌』（Hymns on the Lord's Supper）の中で、この概念を表現している。そして、この讚美歌が、聖餐式と結びついていることから、「神の痛み」が、聖餐式の基となり、この聖餐式に継承されていることが示唆されている。（この聖餐式の問題については「ウェスレー研究Ⅲ」で言及した）

（２）キリスト論と聖化論

（Ａ）キリストの受苦と人間の受苦

キリストの受難は、キリスト者の献身、犠牲の基として聖化論に続く重要な内容を含んでいる。このキリストの受苦とキリスト者の犠牲、献身について考えてみる。ウェスレーは、この関係を『新

約聖書註解』の中で、次のように述べている。

コロサイ 1 : 24 「キリストの苦難にあずかることの不足している分を」 キリストの肢体が苦しむように残されているところを。これらがキリストの苦難と呼ばれているが、それは、(1)肢体の苦難は全体の苦難であり、特にすべてに対する力と勇気と感覚と動きとを与える頭の苦難である、(2)それらの苦難は、キリストのため、またキリストの真理のあかしのためである。またこれは教会のためにも必要である。これらの苦難は、教会を神に和解させるためや、罪の償いのためではなくて（このことはキリストが完全に果たした）、聖徒たちを完うし、彼らの受けるむくいを増大して、外の人々に範例を示すためである。

キリスト者のこの世におけるキリストの為の苦難は、けっして無意味なものではない。ウェスレーは、キリストのゆえに苦難にあずかることは、「聖徒たちを完うし」、意義あるものであると考えている。この苦難の意義は、キリストの苦難に基づいている時、意味を持つ。すなわち、「キリストの苦難にあずかる」時、我々の痛みは、キリストの痛みに参加し、キリスト者の「受けるむくいを増大し」、意味を持つのである。この問題について、北森博士も、『神の痛みの神学』の中で、「我々の痛みが神の痛み^にに奉仕せしめられることは我々の痛みが^{神の}聖化されることである。我々の痛みは神の痛みへの証とせられる時始めて正しきものとなり意義あるものとなる」⁽⁵²⁾と主張している。ウェスレーも、「苦しんだ結果、キリストの苦難に心から全く一致するに到り」（Ⅰペテロ 4 : 1 の註解）と述べている。また、Ⅰペテロ 3 : 18 の註解でも、ウェスレーは、「苦しむことは最善である。それによって、我々はもっとキリストと一致するに至るからである」と説明し、苦難を通して、我々は、キリストと結びつく（Unio Mystica）と主張している。そして、キリストの苦難にあずかることは、キリストの栄光にあずかることである。

Ⅰペテロ 4 : 13 ……キリストの為に苦しむとき、さらに豊かな栄光を望んで「喜ぶがよい」。なぜなら、栄光の量は苦難の量に比例し、苦難が多ければ、栄光をいよいよ豊かに与えられるからである。（『新約聖書註解』）

ウェスレーは、キリストのために受ける苦難を、栄光にあずかるものと考えていることがわかる。まさに、「我々は自己の痛みを通して神の痛みと一つになり、二つの痛みが一つになることにおいて神と我々とが一つになる」（北森博士）⁽⁵³⁾のである。そして、この受苦の一致により我々は、キリストの栄光にも与るのである。しかし、特にウェスレーは、キリストの受苦と我々の義務（苦難）を、聖餐式において関連させている。

I コリント 11:24 「これは、あなたがたのため裂かれたるわたしのからだである」すなわち、このさかれたパンは、今でもなおあなたがたの罪の非行のためにさかれるべき、わたしのからだのしるしである。死をもいとわぬわたしの愛を記念し、謙遜と感謝と服従との思いをもって、このパンを取って食べなさい。あなたがたのために受けたこの上もない苦難、この苦難によってあなたがたのために獲得した祝福、これらによって私があなたがたの上に課した愛と義務との新しい責任、などを記念して食べなさい。(『新約聖書註解』)

ウェスレーは、聖餐式を「今でもなおあなたがたの罪の非行のためさかるべき」キリストのからだのしるしと註解している。そして、聖餐式において参加者は、キリストが、我々のために受けた「この上もない苦難、この苦難によって」我々のため獲得した祝福を受け、そして我々の上に課した「愛と義務との新しい責任」を負わなくてはならないことを明示している。すなわち、 sacramentにおいて、キリストの痛み到我々の責任(受苦)と祝福が、結合されている。北森博士の言葉を用いれば「我々の痛みが神の痛みへの証として奉仕するに至る時、我々の痛みは光に化せしめられ、意義を獲得し、生産的となるのである」。(54)

(B) 人生における苦難と忍耐の意義

ウェスレーは、自分の思いに反して十字架を負うことを、完全へと進むための訓練と教えている。『新約聖書註解』の中で、ウェスレーは次のように記している。

マタイ 16:24 「自己を捨て、自分の十字架を負うて」・・・あらゆる場合に、自分の思いがいかにかましくとも、これを否定し、神のみ旨がいかにか苦痛を伴おうとも、これを実践せよ。わたしたちはいっさいの十字架を、血肉に悲しく見えるいっさいのことを、その真実の意味に、自分の意志をぎせいにして神の意志を抱く好機として、従ってわたしたちが完全に進むためのそれだけの段階として、考えるべきではないか。もし忠実にこれを実行するならば、霊的生活に速やかな進歩を示すことになる。

上記の引用のように、「自分の意志をぎせいにして」、神のみ旨に従うようにしなくてはならない。そのことで、「完全に進むためのそれだけの段階として」、その機会を用いなくてはならないとウェスレーは考えている。

さらにウェスレーは、『キリスト者の完全』の中で、苦難を神がキリスト者に与える試練として教えている。即ち、「神を愛する人々への神の愛の最大の証拠の一つは、神が恵みと共に、苦悩をも与えて、彼らに苦悩を耐えさせることである」(55)と述べている。そして、「最大の苦悩においてさえ、われらが神にあかしをせねばならぬことは、苦悩は神の御手からいただいたものであるこ

と、われらは苦しみの最中にも喜びを感じること、その苦しみは、われらが愛し愛されている神によって与えられたものである」⁽⁵⁶⁾と彼は理解している。その試練の中でも、キリスト者は、その苦悩が、「愛し、愛されている神によって与えられたもの」と受け取るのである。この試練の中で、神を愛する者は、「神のすべての戒めを、力のあらん限り守る。なぜなら、従順は、その源泉たる愛に比例して、湧き出るからである」⁽⁵⁷⁾とウェスレーは教えている。さらに、「神が、人を御自身に引きつけなせる最も容易な方法は、その人が最も愛しているものによって、立派な理由をつけて苦悩させる。……理由は、現世において最も愛すべく、かつ望ましき者の空しさを、これ以上明瞭に示すものは何もないからである」⁽⁵⁸⁾とウェスレーは考えている。したがって、神は、恵みと共に苦難を与え、それに対して神を愛するものは従順に従い、その苦悩の中でも喜びを与えられ、戒めを守る。また神は、人に苦悩を与えることによってこの世の空しさを知らせ神に目を向けさせる。それ故、苦悩（苦難）は、神がキリスト者に、神に目を向けさせるための恵みである。

次にこの苦難の中で重要な働きをなす「忍耐」について、ウェスレーの考えを見てみたい。ウェスレーは、「まことの忍耐は、神の全意志に、徹底した一致をなすものである。神は、罪以外のすべてのことを、世界にもたらすことを望み、かつもたらしなせるかたである。このために、われらは、禍も福もすべて、これを聖旨として受け取っているのである」⁽⁵⁹⁾と述べる。そして「忍耐がなければ神の愛はなく、謙虚と柔和との精神がなければ、忍耐はない」⁽⁶⁰⁾のである。また「本当の謙遜は、無我（Self-annihilation）の一種であって、すべての徳の中心である」、そして、「謙遜だけが、忍耐と愛とを結びつける。謙遜がなければ、苦難から何の利益をも引き出すことができない」⁽⁶¹⁾とウェスレーは述べている。そして、苦難と忍耐について、ウェスレーは、「もしわれらが、正しい態度で、迫害と苦難とを忍ぶならば、それらの機会の一つを善用することによって、キリストに合致するための、より高い段階に昇ってゆくのである」⁽⁶²⁾とまとめている。つまり、我々は、苦難を通して、キリストと神秘的に合一するのである。

北森嘉蔵博士は、『神の痛みの神学』の中で、この苦難（痛み）を「我々の痛みは神の痛み[○]に奉仕することによって、真実に救われるに至るのである。人間の世界に起る一切の痛みは、それが神の痛み[○]に奉仕するものとならない限り、無意味にして実りなきものである。我々は人間の痛みを空費しないように努めねばならぬ」⁽⁶³⁾と述べているが、ウェスレーの思想を理解する参考になる。

ウェスレーは、「あなたがたはあなたがたの苦しみのただなかでキリストをあがめる」（Ⅰペテロ 4：14の註解）と述べているが、我々の痛みを通してキリストの痛み[○]に近づき、キリストの受苦に本質概念として結びつくのである。さらに北森博士は、『自乗された神』の中で、「神の痛みは私自身の痛みを要求する」⁽⁶⁴⁾と述べているが、ウェスレーにおいても、我々は、神の業への参与における痛み、犠牲を通して、神の赦しの痛みを知るのである。それ故、キリストの受難、神の痛みは、我々の倫理的行為を要求する。まさに「神学は倫理学にまで展開せねばならぬ」⁽⁶⁵⁾のである。ここにウェスレーの聖化・完全論の倫理的基礎がある。ウェスレーは、明らかに、我々人間の聖化・

完全論を、キリストのこの世における苦難の生涯と関連させている。ウェスレーのキリスト論は、「イエスの生涯全体が『痛みの途』(via dolorosa)」⁽⁶⁶⁾として捉えられていることが分かる。そしてウェスレーは、そのキリスト論の上に、聖化・完全論を考えていたと言えるのではないだろうか。

この拙論は、第1章の4節を日本宗教学会第46回学術大会(1987年9月17日、立教大学)で、また、第2章の1節を、日本基督学会第35回学術大会(1987年9月29日、関西学院大学)で、それぞれ口頭発表したものを、修正加筆したものであります。

註

- (1) Wesley, Work 6:199.
- (2) ウェスレー著、松本卓夫・小黒薫訳『新約聖書註解上』1960年、松本卓夫・草間信雄『新約聖書註解下』新教出版社、1979年
- (3) Explanatory Notes upon the New Testament, (Naperville: A.R. Allenson, 1966) P.917.
- (4) Works 6:202
- (5) 野呂芳男著『ウェスレーの生涯と神学』日本基督教団出版局、1975年、282頁
- (6) C.W. Williams. John Wesley's Theology Today, (Nashville: Abingdon Press, 1960), P.89.
- (7) I ヨハネ 5 : 3 の註解
- (8) 野呂芳男訳『ウェスレー著作集 4』114頁。
- (9) 同上
- (10) 野呂芳男著『ウェスレーの生涯と神学』370頁
- (11) Works 7:513.
- (12) David Lerch Heil und Heiligung bei John Wesley (Zurich: Christliche Vereinsbushandlung, 1941), S.78.
- (13) Works 6:507.
- (14) John Deschner, Wesley's Christology (Dallas; Southern Methodist University Press, 1960).
- (15) 野呂芳男著 『ウェスレーの生涯と神学』 365頁。
- (16) 『ウェスレー著作集 5』 307－8 頁。
- (17) 野呂芳男著、前掲書、372頁。
- (18) Lerch, *ibid.*, P.33.
- (19) Deschner, *ibid.*, P.33.
- (20) *Ibid.*
- (21) *Ibid.* P.35.
- (22) W. パネンベルク著、『キリスト論要綱』、麻生信吾・池永倫明訳、新教出版社、1982年、417－8 頁
- (23) 野呂芳男著。前掲著、382頁。
- (24) Lerch, *ibid.*, S.77.
- (25) 野呂芳男著。前掲書、382頁。
- (26) パネンベルク著。前掲書、409頁
- (27) Works 7:512.
- (28) 野呂芳男著。前掲書、370頁。

- (29) 野呂芳男著。前掲書、404頁。
- (30) 同、403頁。
- (31) Works 7:486.
- (32) Works 7:487.
- (33) Works 7:486.
- (34) 野呂芳男著。前掲書、370頁
- (35) 同、402頁。
- (36) 同。
- (37) 同、403頁。
- (38) 同。
- (39) Lerch, *ibid.*, 78.
- (40) The Interpreter's Dictionary of Bible, "Prince," by C. U. Wolf.『NTD新約聖書註解 5』125頁。
- (41) Ole E.Borgen John Wesley on the Sacraments (Zurich: Publishing House of the United Methodist Church, 1972),PP.67—8.
- (42) Lerch, *ibid.*, S.78.
- (43) L. M. スターキー著。『ウェスレーの聖霊の神学』、山内一郎、清水光雄訳。新教出版社、1985年、150頁。
- (44) J.E.Rattenbury, THE Eucharistic Hymns of John and Charles Wesley(London: Epworth Press, 1945),P.27.
- (45) 佐藤敏夫著。『救済の神学』。新教出版社、1987年。157—8頁。
- (46) 同、151頁。
- (47) 『ウェスレー著作集 3』 407頁。
- (48) 北森嘉蔵著。『神の痛みの神学』、62頁参考。
- (49) 北森嘉蔵著。『自乗された神』、日本之薔薇出版社、昭和56年。
- (50) 同、159頁。
- (51) 同、121頁。
- (52) 北森嘉蔵著。『神の痛みの神学』、78頁
- (53) 同、119頁。
- (54) 同、75頁。
- (55) ウェスレー著。『キリスト者の完全』、山口徳夫訳註、キリスト新聞社、1973年、136頁。
- (56) 同上。

- (57) 同、23頁。
- (58) 同、136頁。
- (59) 同、137頁。
- (60) 同、138頁。
- (61) 同上。
- (62) 同、136頁。
- (63) 北森嘉蔵著。『神の痛みの神学』、75頁。
- (64) 北森嘉蔵著。『自乗された神』、209頁。
- (65) 同、210頁。
- (66) 北森嘉蔵著。『神の痛みの神学』、58頁。